解　　説

１.『伝える、励ます、学ぶ、被災地方言会話集』とは

『伝える、励ます、学ぶ、被災地方言会話集－宮城県沿岸 15 市町－』は、被災地の方言会話資料である。宮城県沿岸部の 15 市町を対象に、東北大学方言研究センターが作成した。被災地の方言会話を記録し、会話資料を作ることの必要性は、すでに東北大学方言研究センター（2011･2012）で述べておいた。それを実地に移したのが本資料である。

この会話資料の構成を説明しよう。まず、みなさまが今ご覧になっているのが冊子体の資料であり、会話を文字起こしした本文データなどが収められている。また、実際の会話の音声はこの冊子の裏表紙に添付した CD-ROM に収録してある。CD-ROM の利用方法は、この冊子の最後のページに記してある。

この資料（冊子）の構成は次のようになっている。

解　説

この会話資料の基本的な考え方や収録調査の方法、資料作成の方法、Ｗｅｂ方言会話集の試みなどについて解説した。

各地点の会話

地点ごとに次の内容を掲載した。

地点概要：各市町の概略や収録地点の様子について簡単にまとめた。

自由会話本文：自由会話の本文を掲載した。

場面設定会話本文：場面設定会話の本文を掲載した。

方言概観：各市町の方言的特徴について簡単に解説した。

２.この会話集の考え方

2.1. どんな資料を作るべきか ―被災地の方言会話として

私たちが作ろうとしたのは方言会話資料である。ただ、それが今回の大震災の被災地のものであることを考えたとき、従来の会話資料を真似るだけでよいのか、という疑問が浮上した。つまり、被災地の会話資料としてどのようなものを作るべきなのか、あるいは、いかなる意義をもった資料とすべきなのか、という問題である。いわば今回の取り組みのコンセプトを問うてみることで、作業に入る前に、この会話資料の目指すところ明確にしたいと考えた。

この問いに対して、私たちなりに検討した結果、次のような答えを見出した。

被災地方言の記録：まず、この資料には、方言の記録としての意義をもたせたいと考えた。各地の伝統方言は、今や共通語化の影響で著しく衰退しつつある。ましてや、コミュニティの崩壊が起こった被災地では、方言の話し手である地域住民が減少することで、そうした動きに拍車がかかる

恐れがある。そうした被災地の方言を記録し、後世に伝えることが必要だと考えた。いわゆる危機言語としての方言の記録の必要性は叫ばれているが、今回の資料は、さらに災害に伴う危機言語の記録としての特色をもつものにすべきである。

被災者への励まし：次に、この資料は、被災者を励ますものでもありたいと考えた。小林隆（2004）などで指摘したとおり、方言は現在、言葉そのものとしての性格よりも、心情的な役割を強く担うようになってきている。方言は“ふるさと”の象徴であり、人々は方言を通して地域住民としてのアイデンティティを確認する。また、方言はそこに暮らす人々の心理的な距離を縮め、仲間意識・一体感を醸成する。実際、東北大学方言研究センター（2012）で紹介したとおり、方言スローガンや方言を用いた支援活動は被災者の心の支えとなっている。この談話資料は、そうした“つなぐ言葉”としての方言、あるいは“絆”としての方言の機能を活かしたものにしていきたい。

支援者の方言理解：最後に、この資料が、被災地の支援にあたる人たちにも役立ててもらえるものであってほしいと考えた。私たちは東北大学方言研究センター（2012）で述べたとおり、支援者たちが被災地の東北方言がわからずに困ったという体験を把握している。そのような問題を解決する一助として、支援者のための簡単な方言パンフレットを作成したが、利用者からは、地元の人たちの生の会話を聞くことができないものかという感想が聞かれた。また、現地の文化を理解する一環として、被災地の方言についても知っておきたいという積極的な意見もあった。そうした支援者の要望にも何らかの形で寄与できる会話資料が望ましい。

以上、被災地の方言会話資料として、私たちは次のような性格を備えたものを作ることにした。

① 被災地の方言を記録し後世に「伝える」ことを目指す方言会話資料
② 困難の中にある被災者を精神的に「励ます」ための方言会話資料
③ 支援者が被災地の方言を「学ぶ」ことに役立てる方言会話資料

そして、こうした目的をタイトルとして冠したのが、この方言会話資料、『伝える、励ます、学ぶ、被災地方言会話集』である。

2.2. どのような工夫をしたか ―方法論上の特色

上記の①②③はこの方言会話のいわばコンセプトである。それでは、そうしたコンセプトを実現するために、具体的にどのような工夫を行ったのか。次にその点について述べることにする。

震災の体験を会話のテーマに：①の方言の記録という目的については、会話資料の作成自体がその意義を帯びるものだと言える。しかし、それでは従来の会話資料と変わるところがない。被災地の会話資料としての有用性を求めるならば、そのテーマ設定に工夫を凝らすのがひとつの方法であると思われる。被災地においては、震災の体験を風化させないことがひとつの課題となっている。

それならば、方言を後世に伝えると同時に、震災の体験も語り継ぐことができるような資料にすることが望ましい。白岩広行（2012）でもそうした資料の必要性が強調されている。そこで、この会話資料においては、「震災の体験」を主要なテーマとして設定した。もちろん、震災に関わる話題は、被災者の精神的な負担となる恐れもあり、慎重に扱う必要がある。その点に配慮し、ほかに「地域の伝統文化」「方言への思い入れ」というテーマも選択肢に加えた。「震災の体験」は震災関連科学の情報源としても役立つはずであり、「地域の伝統文化」は民俗学をはじめとした関連分野にとっても重要な記録となるにちがいない。

言語行動の種類に基づく場面設定会話：①の方針に関して、この資料のもうひとつの特徴は、自由会話のほかに場面設定会話を収録する点である。特にここでは、目的別の言語行動の種類に基づいて場面を設定し、話者 2 人にロールプレイ会話を行ってもらうことにした。これは話者に一定の負担を強いることにはなるが、その地域の日常生活において起こり得るさまざまな会話場面を収録しようというものである。こうした言語行動の枠組みに従った収録方式は自由会話の採取に比べ、現地の言語生活を全体的、かつ、効率的に把握する点で優れている。今後の会話資料作成のひとつの方向性を示すものとして、この方式はさらに検討されてよい。

また、このような言語行動を軸にした場面設定会話の収録は、この会話資料が③の支援者の方言学習にも役立つことを意図して行ったものでもある。被災地の人々の会話データは、外部からの支援者にとって、その地域の言葉遣いの様子を知る重要な手がかりとなる。実際に触れる現地の人々の言語行動が網羅的に理解できるようになれば、それは支援者にとって意味のあることにちがいない。その意味では、支援者の予習にも対応できるように、挨拶、依頼・受託・断り、感謝・謝罪といった言語行動の種類に基づいた場面を設定し、効率よく現地の会話に親しんでもらうこともひとつの方法であると考える。

詳細な収録地点の設定：これは①②③のいずれのコンセプトにも関わるものである。従来の方言会話資料の収録地点は各県 1・2 地点の数であり、かならずしも多いとは言えなかった。①の方言の記録という観点から見たとき、被災地を細かくカバーする地点規模が必要と思われた。また、②の被災者への激励という視点から見た場合、自分が暮らす地域の会話が採られていないというのはマイナス要素であり、被災者に残念な思いをさせてしまう。この点でも、ある程度の地点密度で収録を行うことが必要になる。さらに、③の支援者の方言理解への補助というコンセプトからも、各地に入り込む支援者のために、細かな収録地点の設定が望ましい。こうした収録地点の網羅性を求める立場から、この会話資料では、宮城県沿岸部の 15 の市町をすべて対象とすることにした。もちろん、同じ市町の中にもいくつかの地域割りは存在し方言差も見られるが、地域住民の帰属意識の上からも、また、方言学的な見地からも、市町単位で収録地点を設定するのが無難であり、妥当ではないかと考えた。

インターネットでの配信：この会話資料は、いわゆる紙媒体の報告書としてだけでなく、インターネットでも配信を行うことにした。むしろ、インターネットでの配信はこの報告書に先行させて進めてきた。これは、より多くの人たちに、この資料の存在を知り、利用してほしかったからであ

る。②の点に関して言えば、全国に散らばる避難者にふるさとの方言を届けるという役割がこの資料には期待される。③の点について言えば、日本各地から集まる支援者に、被災地への出発前にこの資料で現地の方言について知ってもらうことができればよい。そうしたことを少しでも可能にするためには、インターネットを使った配信が効果的であると考えた。

なお、この点については、「５.Ｗｅｂ方言会話集」であらためて取り上げたい。

以上、この方言会話資料は、次のような点で方法論上の特色を出そうと試みた。

a. 会話のテーマとして「震災の体験」等を設定することにより、現地の人々の震災体験を語り継ぎつつ、方言を後世に伝えることができるようにする。
b. 目的別言語行動の枠組みに従った会話の収録方式をとることで、現地の言語生活を全体的、かつ、効率的に記録する。また、支援者にも、被災地の方言について手軽に学習してもらえるようにする。
c. 収録地点の網羅性を求める立場から、宮城県沿岸部の 15 市町をすべて対象とすることにする。
d. インターネットでの公開を行うことで、全国に避難した被災者や日本各地から集まる支援者に、効果的にこの資料を利用してもらう。

３. 収録調査の方法

3. 1. 収録地点と話者

会話の収録は、宮城県の中でも、特に津波による被害の大きかった沿岸部 15 市町を対象として行った。すなわち、次の市町である。

気仙沼市、本吉郡南三陸町、石巻市、牡鹿郡女川町、東松島市、宮城郡松島町、宮城郡利府町、塩竈市、宮城郡七ヶ浜町、多賀城市、仙台市（若林区）、名取市、岩沼市、亘理郡亘理町、亘理郡山元町

具体的な収録地点は、その市町の範囲であればどこに設定してもよいことにした。実際には、津波の被害を受けた沿岸部の地点が収録地点として選ばれることもあれば、そうでない内陸部の地点が選定されることもあった。被災地方言の記録という点を非常に狭く考えれば、津波のよる浸水地域を収録地点にすべきであるが、現実問題としてそうした地域の人々は生活上、非常に困難な状況に置かれていることが多く、調査の負担をかけることは控えるべきだとも考えた。逆に、たとえ内陸部の地点であっても、今回の震災による方言への影響を免れることはできず、調査の必要性は沿岸部に劣らず認められるものと判断した。また、かえって被害の少ない地域の方が、話者から落ち着いてお話を聞くことができるのではないかとも考えた。

もっとも、実際には、仮設住宅にお住いの方々に話者になっていただくという場合もあった。中には、家を失ったり身内や知り合いを亡くされたりした話者の方々もいらっしゃったが、そうした状況の中でも、私たちの調査の趣旨を理解し、会話の収録に協力してくださった。

話者となったのは原則として各地域の生え抜きで、70 歳前後の男女各 1 名ずつの方々である。その 2 人にペアになってもらい、会話をしていただいた。ただし、現実には、それより高齢の、あるいは若い話者が選ばれることもあった。性別も女性同士の会話というケースも見られた。また、人数も地域によっては 3、4 名になる場合もあった。

なお、収録地点および話者についての情報は、各市町の会話資料の冒頭にやや詳しく記しておいたのでご覧いただきたい。

3. 2. 調査者と協力機関、収録日時

この会話の収録調査は、東北大学方言研究センターの教員と学生たちが中心となって行った。指導的立場の教員・大学院生と経験の少ない学部生とがチームを組み、1 チーム 2 市町を担当することにして現地に赴いた。具体的な収録担当者（文字化担当者でもある）は、各市町の会話資料の末尾に掲げてある。

収録に当たっては、話者の紹介を含めて次の協力機関・協力者のお世話になった。

気仙沼市教育委員会生涯学習課、南三陸町教育委員会生涯学習課、法音寺（石巻市）、松厳寺（石巻市）、グランド・グレイス・プロジェクト、女川町教育委員会生涯学習課、東松島市教育委員会生涯学習課、東松島市コミュニティセンター、松島町教育委員会生涯学習班、利府町教育委員会生涯学習課、塩竈市教育委員会生涯学習課、塩竈市社会福祉協議会地域福祉課、多賀城市教育委員会事務局文化財課、七ヶ浜国際村国際交流係、仙台市若林区区民部まちづくり推進課、仙台市七郷市民センター、名取市方言を語り残そう会、岩沼市教育委員会生涯学習課市史編纂室、亘理町教育委員会生涯学習課、山元町教育委員会生涯学習課

収録調査は、2012 年 7 月から 8 月にかけて実施したほか、その後、再調査や補充調査のために 2013 年 2 月までの間、現地を訪れた。

3. 3. 会話の形態

自由会話と場面設定会話の 2 種類の会話を収録した（そのねらいについてはすでに 1.2 に述べた）。

①自由会話：話者たちの自然な会話を 1 時間程度収録した。その際、「震災の体験」や「地域の伝統文化」「方言に対する思い入れ」など、大まかな話題をこちらから提示し、それについて自由に会話してもらった。そのうち、10 分前後の会話を公開した。

②場面設定会話：言語行動の目的別に特定の場面を設定し、話者にロールプレイ会話を行ってもらった。具体的には次の 15 場面である。

【場面設定会話の指定場面】

＜あいさつ＞

(1) 朝、道端で友人に会ったときにどのようなやりとりを行うか。

(2) 昼、道端で友人に会ったときにどのようなやりとりを行うか。

(3) 夜、道端で友人に会ったときにどのようなやりとりを行うか。

＜労い＞

(4) A が仕事に精を出す B と会い、B の労をねぎらう際にどのようなやりとりを行うか。

＜勧め＞

(5) A が、仕事をしている B に、「少し休んでお茶とお菓子でも食べなさい」と勧める際のやりとり。

＜訪問時の声掛け＞

(6) 昼間、A が B 宅を訪れるときにどのように声をかけるか。また、返事をするか。

＜借用の依頼と受託＞

(7) A が B にスコップを借りるときのやりとり。（B が貸す場合。）

＜お礼＞

(8) A が借りたスコップを B に返しに行ったときのやりとり。

＜破損の謝罪・許容・不満＞

(9) A が B に借りたスコップを壊してしまい、謝るときのやりとり。

(9-1) B が構わないという場合。

(9-2) B が破損に対して不満を述べる場合。

＜誘いと断り＞

(10) A が B を近くの物産市に誘う際のやりとり。（B が断る場合。断る理由は、家族と外出の先約。）

＜お見舞い＞

(11) 体調を崩している B に、A が体の調子を尋ねる際のやりとり。

(11-1) B の調子がいい場合。

(11-2) B の調子が悪い場合。

＜申し出＞

(12) 体の調子が悪く、家の片付けもできないという B に、A が「（私が）片付けてやろう」というときのやりとり。

＜禁止＞

(13) 片付けの最中に、大事な写真を A が間違って捨てようとしているときに、B がそれを制止してどのようにいうか。

４. 資料作成の方法

4. 1. 文字化の方法

文字化はまず各地点の収録担当者たちが行い、その後、各地点の責任者が合同で検討会を開き、音声を聞きながら文字化資料を修正していった。最終的には編集・ホームページ担当者が各地点の責任者と打ち合わせながら文字化本文を確定した。

文字化の方式の参考にしたのは、国立国語研究所『日本のふるさとことば集成』と同じく『方言談話資料』である。前者の方式を基本に、一部、後者の方式を取り入れた。

その方式を以下に示す。

１．文字化の概要

文字化に当たっては、方言を文字化したものと、それを共通語訳したものを上下段に並べて表記した。方言は上段にカタカナで表記し、共通語訳は下段に漢字かなまじり表記で記してある。なお、基本的には文節で分かち書きをしてある。

方言音声 → 上段、表音的カタカナ表記 共通語訳 → 下段、漢字かなまじり表記

２．発話者の表示

① 発話の単位

１人の話者が続けて話している、話者が交替するまでの連続した発話を１発話とした。（発話権が交替するまで）あいづちは別に処理した。

② 発話記号

話者、調査者など、談話の場にいる人物にＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄ～のようにアルファベットで記号をつけてある。

③ 発話番号

発話の通し番号を、話者記号の前に入れてある。

例：001Ａ：～　　012Ａ：～　　123Ａ：～

３．固有名詞

個人が特定できるような固有名詞、話者名及び一般の人名についてはアルファベットに置き換えてある。

話者 → 「Ａ」「Ｂ」などの話者記号を使用

第三者 → 「X」を使用。複数出てくる場合は半角数字を後ろに付けて区別した。

例：X1 チャン、X2 サント～

人名以外 → 「Y」を使用。複数出てくる場合は半角数字を後ろにつけて区別した。

なお、歴史上の人物、有名人、話者の個人情報に関係しない会社名その他の固有名詞、地名についてはそのまま記載した。

４．文字表記の基準

【方言文字化部分】

表音的カタカナ表記を用いた。音声の方言的特色（キの口蓋化、母音の無声化など）は、特に書き分けることはしていない。

長音：「ー」　例：ソーナンダ　（×ソウナンダ）

助詞：「は」→「ワ」　例：アレワ　ナンダガ

「を」→「オ」　例：コレオ　モッテゲ

「へ」→「エ」　例：ガッコーエ　イグ

鼻濁音：半濁点を使用してある。

ガ行鼻濁音「カ゜」「キ゜」「ク゜」「ケ゜」「コ゜」

入り渡り鼻音は上付き文字を使用「ᶨダ」

中舌音：どちらかの音声の近いほうを採用した。

例：スに近いシ →「シ」

シに近いス →「ス」

「ア」と「エ」の中間の音については「エァ」「アェ」という表記も許容した。

例：「ネァ（ない）」「ナェ（ない）」

四つ仮名：「ジ」「ズ」に統一した。（「ヂ」「ヅ」は使用していない）

例：「アエズ（あいつ）」

【共通語訳部分】

意訳はできるかぎり行わず、基本的に方言の直訳とした。

漢字かなまじり表記を用いてある。

助詞：ないと読みにくい場合のみ適宜補った。補ったものは[　]でくくってある。

？　：ないと疑問文と判断しにくい場合のみ適宜補った。

長音：感動詞などにおいては、基本的に長音記号「ー」を使用した。

５．記号の見方

【方言文字化部分】

。（句点）：ポーズがあり、意味的に１つのまとまりを持つ文の最後につけた。

、（読点）：基本的に息をついた箇所またはポーズのある箇所に付してある。
読みやすさを重視して付した部分もある。

（　　）：あいづち。発話権が移っていない時に話をさえぎったり、口を挟んだりした箇所。
例：ソーヤッテ　ムガシワネー（B　ンダネー）ヤッテダンダー。

｛　　｝：笑い声、咳払い、間などの非言語音。
例：｛笑｝｛咳｝｛手を叩く音｝

〰〰：聞き取れない部分には波線を引いた。
例：オチャズケノ〰〰
聞き取りが不十分な部分は、聞こえた音を記した箇所に波線を引いてある。
例：コエズカレデ

＿＿：発話が重なっている部分には、普通の下線を引く。
あいづちは発話を（　）に入れ、重なっている部分には下線を引いた。
例：モラッテクダサイ（A　ソーダ）（B　モラテー）

＿＿：発話が重なり、かつ聞き取れない部分には、二重下線を引いた。
例：アイズ　＿＿＿（B　ホンテ）オドゲデネーゴド
発話が重なって聞き取りが不十分な部分は該当箇所に二重下線を引いた。
例：アイズ　キタナー（B　ホンテ）オドゲデネーゴド

〔　　〕：注記。〔　〕内の数字は注記番号で、本文の後に注記をまとめてある。
同様の内容は同じ注記番号を使用した。
主に固有名詞や地域特有の言葉の意味や用法について、注記のページで解説してある。その他、特に注意しておきたい音声的特徴などにも使用したものもある。
例：ムガシワ　サンザンサ〔1〕　エッタゲンド

【共通語訳部分】

。（句点）：ポーズがあり、意味的に１つのまとまりを持つ文の最後につけた。

、（読点）：基本的に息をついた箇所またはポーズのある箇所に付してある。
読みやすさを重視して付した部分もある。

？：疑問文であることがわかりにくい箇所に適宜使用する。
例：チョー　エギサ　エッタナ。
今日　　駅に　　行ったの？

（　　）：あいづち。発話権が移っていない時に話をさえぎったり、口を挟んだりした箇所。
例：ソーヤッテ　ムガシワネー（B　ンダネー）ヤッタンダー。
そうやって　昔はね　　（B　そうだね）やったんだ。

｛　　｝：笑い声、咳払い、間などの非言語音。
例：｛笑｝｛咳｝｛手を叩く音｝

××××　：言い間違いや言いよどみなど、共通語訳ができない部分。

例：ム　ム　ムツカシー

×　×　難しい

〰〰　：聞き取れず、共通語訳も不明な部分には波線を引いた。

聞き取りが不十分で共通語訳も不十分な部分は該当箇所に下線を引いた。

例：ツナミ　〰〰〰〰〰〰ネクテ

津波　〰〰〰〰〰〰なくて

＿＿＿　：発話が重なっている部分には、方言の部分に準じて下線を引いた。

例：005Ａ：ハイ　コイッテ　イーベガネッスー。

はい　これで　いいでしょうか

006Ｂ：アー　ソイズダー。　モラッテクダサイ（Ａ　ソーダ）

あー　それだー。　もらってください（Ａ　そうだ）

＝＝＝　：発話が重なっており、聞き取れない、または聞き取りが不十分であり、共通語訳も不明な部分には、方言の部分に準じて二重下線を引いた。

例：ビョーギ　＝＝＝（Ｂ　＝＝＝）シタンダ。

病気　＝＝＝（Ｂ　＝＝＝）したんだ。

／／／／　：対応する共通語訳が不明な部分。

できるだけ注記を入れるなどして、話の流れはわかるようにした。

例：モーゼーノ　モジナンデスナ。

／／／／／　文字なんですね。

［　］　：方言音声には出てこないが、共通語訳の際に補った部分。

例：ミカン　ノセテ

みかん［を］　乗せて

※ 意味の説明や意訳にも使用した。その場合は「＝」を付してある。

例：イマ　ユー

今　いう［＝今話題にあがった］

4.2. 音声データの方法

この報告書には各地点の自由会話と場面設定会話を収めたCD-ROMが付属している。各会話の収録時間は平均して自由会話10分前後、場面設定会話5分前後である。15市町全体で200分を越える音声データとなったため、録音したWAVEファイルをMP3形式に圧縮変換してCD-ROMに収めた。ただし、収録時間は自然な会話の流れとまとまりという観点から地点ごとにかならずしも統一されてはいない。

音声を公開するにあたって、個人が特定できるような人名やその他の固有名詞については該当箇所の音声に自主規制音（ピー音）をかぶせる処理を行った。

また、場面設定会話については、原則として収録されたとおりの内容を公開したものの、地点によっては実際の内容そのままではない部分がある。例えば、話者同士の会話にならず、話者が調査者に教えるような状況になってしまった場合など、収録された会話に著しく不自然な流れが目立つときには音声の切り貼りによる編集を行うことがあった。このような処理を行った地点については、その旨注記を施しているが、資料利用の際には注意を要する。

今回の会話の収録は、震災後の不便な状況の中で、狭い仮設住宅や大勢の人の集まる場所で行わざるを得ないことがあり、そうした点が上記のような収録の不具合につながった。この点については、今後こうした状況下で行われる会話収録にとって、ひとつの検討課題として残された。

5．Ｗｅｂ方言会話集

5.1. ホームページでの公開

以上のようにして作成した会話資料は、この報告書に先立つ 2013 年 1 月 10 日から、東北大学方言研究センターのＷｅｂサイト「東日本大震災と方言ネット」（http://www.sinsaihougen.jp/）で公開している。そこでは、文字化本文のＰＤＦデータとその音声の配信を行っている（図 1）。

図１「伝える、励ます、学ぶ、被災地方言会話集」Ｗｅｂページ

以下、このＷｅｂ方言会話集を構築した意義や技術、課題について解説する。

5.2. 東日本大震災と方言ネットとは

まず、Ｗｅｂ方言会話集を配信する「東日本大震災と方言ネット」について、簡単に解説する（詳しくは東北大学方言研究センター（2012）をご覧いただきたい）。

「東日本大震災と方言ネット」とは、私たち、東北大学方言研究センターが運営するＷｅｂサイトである。その目的は、研究面では、これまでの「大震災と方言」の研究成果と、これからの動向の把握を容易にし、今後の研究の効率化・活性化に利することを目指し、社会的には、被災者・支援者に役立つ情報の発信により、被災地の復興への手助けをしていくというものである。

そういった目的意識の下、2012 年 2 月現在、方言イベントや大震災と方言に関わる研究会の情報の発信、被災地の方言に関わる研究文献目録の配信、被災地での調査スケジュールの公開・共有などの、さまざまなコンテンツを運用している（図 2）。

図 2 東日本大震災と方言ネットＴｏｐページ

5.3. 被災地方言会話集をＷｅｂ上で構築する意義

そもそも、被災地方言会話集作成の目的は、主に、①消えゆく方言の記録と継承に向けた準備、②被災地への支援活動の一環、という側面がある（小林隆 2012）。しかし、その目的に対して、従来のような冊子媒体での資料集として作成する方法だけでは十分な効果が得られない可能性があることが、今回のような災害に際して浮き彫りになった。

まず、②の側面に関して、冊子媒体での資料集での公開の問題点を指摘する。②の「被災地への支援活動」という目的には、支援者と被災者に向けた側面がある。支援者には、被災地の方言を予め知ってもらい、被災地でのコミュニケーションを円滑にし、活動に役立ててもらうという意味、被災者には、ふるさとの方言を聞いてもらうことで、心理的に励まそうという意味である。特に、2 点目の被災者への心理的支援は、遠方へ避難・移住し、ふるさとの方言を耳にする機会に久しい住民の方にこそ、その効果が大きいと期待される。

総じて②の目的は、不特定多数の被災者と支援者を対象にしており、そのような人たちに行き届いてこそ意味があるということである。しかし、費用面の問題等でどうしても数が限られる冊子媒体での資料集では、全国各地に避難・移住している可能性がある無数の被災者の方々や、潜在的に、全国どこの誰でもなる可能性がある支援者に、気軽に利用してもらえるように配布・配置するのに限界がある。

一方、現代では、インターネットの利用が広まり、Ｗｅｂによる情報の発信と共有が一般的になりつつある。インターネットを利用したＷｅｂ配信なら、インターネット環境さえあれば、どこからでも、無制限に、被災地方言会話集の資料にアクセスしてもらうことができる。そこで、この被災地方言会話集を、不特定多数の被災者と支援者にも利用してもらえるようにすることを企図し、Ｗｅｂ上に構築した。こうすることで、より多くの方の目に触れ、その効果を発揮できると考えられる。

また、「東日本大震災と方言ネット」のＷｅｂサイトは、スマートフォンなどの携帯メディアでの利用にも対応している。携帯メディアの通信速度、使っているＷｅｂブラウザの種類に制限を受けることもあるが、基本的には、携帯メディアから、方言会話集の音声を再生することも可能である。これは、ノートＰＣなどよりも携帯性に優れたメディアでの利用を可能にすることで、より幅広い場面での使用を可能にする試みである。例えば、方言会話集の自由会話を再生しながら、それを話の種にクイズやコミュニケーションをするといったことや、日常のやり取りの中で分からなかった言葉などを、すぐさま場面設定会話で検索するといった利用方法を想定している。このように携帯メディアでの使用を可能にしておくことは、資料の利用の幅を広げるという点からも、効果が期待できるであろう。

次に①の側面に関してだが、消えゆく方言の記録と継承の準備という点からも、Ｗｅｂ上での公開という形態には利点がある。それは、貴重な方言の資料を、Ｗｅｂ上で公開するとともに、一定の方法で保存しておくことで、災害による資料の損失に備えることができるということである。

今回の東日本大震災や、それに伴う津波によって、多くの貴重な文化財や歴史資料が被害を受け、その文化財・資料を保全する活動などが各地で行われてきた（天野真志 2012）。その活動は、被災からおよそ 2 年になる現在に至るまで続けられている。一度津波などで被災した資料の復元・保全は困難で、膨大な時間を割かれるためである。津波による被害を受けなかった地域においても、建造物の被害や、それに伴う家財などの財産の被害は、計り知れないほど大きい。これまでの貴重な学術調査の資料などを、数多く収める大学の諸機関なども、その被害は少なくなかった（永田英明

2012、永田英明・徳竹剛 2011)。

つまり、今回の大規模な災害の被害によって、蔵などに眠る貴重な歴史資料ばかりか、近代的な建造物に保管される調査資料といった類のものさえ、一挙に被害を受ける可能性があるということが露呈したのである。さらに、被害を受けた資料は必ずしも復元できるとは限らず、その点で、そこに記された貴重な情報が永遠に失われてしまう可能性もある。

こういった大震災被害の状況を踏まえ、今後、いつ起きるか分からない大災害と、それに伴う貴重な資料の損失の脅威に備え、何らかの方法で資料を保存し、バックアップを取ることが求められている。その保存方法のひとつとして、「伝える、励ます、学ぶ、被災地方言会話集」のような形で、Ｗｅｂ上にデータをおくということが考えられる。それが、貴重な資料の保存、バックアップを取るということにもつながる。

ただし、「伝える、励ます、学ぶ、被災地方言会話集」のＷｅｂサイト上での保存の取り組みは、単に、資料を電子化し、Ｗｅｂ上で保存するということを特色にしているわけではない。というのも、通常なら、大学の所属部局のＷｅｂサイトは、大学のＷｅｂサーバシステムに組み込まれ、そのホストコンピュータに保存されることが多い。そうすると、例えば、東北大学方言研究センターの貴重な方言音声資料が災害により失われ、さらに、東北大学のホストコンピュータすら、被害を受けて壊れたとなると、資料やそのデータは必ずしも無事とは言えなくなってしまう。

しかし、その点、「東日本大震災と方言ネット」のコンテンツは、クラウドプロバイダサービスや、オンラインストレージサービスを利用して構築され、そのような場合にも対応する保存方法を有している。クラウドプロバイダやオンラインストレージによる保存は、簡単に言えば、大学のホストコンピュータのように一か所に貴重なデータが集約され保存されるのではなく、Ｗｅｂ上の無数のコンピュータにデータが保存されている状態ということである。そのため、例えば、東北大学方言研究センターの貴重な方言音声資料が災害により失われ、さらに、東北大学のホストコンピュータすら、被害を受けて壊れたとしても、資料のバックアップは依然として残るということである。つまり、今回の震災のような、広範囲、大規模の災害に直面しても、貴重な資料が失われるリスクを減じる対策として機能するのである。

このように、大きな情報配信力と利便性、手軽さを持ち、バックアップとして、災害などの被害にも強い保存性に優れた資料を意図して、Ｗｅｂ上に配置したことが、本会話集「伝える、励ます、学ぶ、被災地方言会話集」の意義と言える。

5.4. Ｗｅｂ方言会話集作成のための技術について

ここでは、「伝える、励ます、学ぶ、被災地方言会話集」をＷｅｂ上に作るために利用しているサービスなどについて述べる。これは、今後、次なる災害に備えるＷｅｂ方言会話集制作の参考となるよう、記すものである。

前節で述べたように、「伝える、励ます、学ぶ、被災地方言会話集」を含む「東日本大震災と方言ネット」のコンテンツは、クラウドプロバイダサービスや、オンラインストレージサービスを利

用して、構築している。クラウドプロバイダサービスやオンラインストレージサービスによるＷｅｂサイト制作を選んだのは、前節に述べたような災害による被害に対するデータ保存性の強さという意味合いがあるが、数あるサービスの中で「東日本大震災と方言ネット」が選んだクラウドプロバイダ、オンラインストレージは、「Ｊｉｍｄｏ」と「Ｄｒｏｐｂｏｘ」である。

これは、ひとつには、それぞれ、比較的シンプルで扱いやすいということを重視して選んだ結果である。例えば、「Ｊｉｍｄｏ」は、Ｗｅｂサイトを作るにあたり、専門的知識ともいえるＨＴＭＬ（HyperText Markup Language）を知らなくても、Ｗｅｂサイト制作が可能となる。「Ｊｉｍｄｏ」は、「文章」「写真」「ファイルダウンロード」など、いくつかの項目をメニューから選んで、決まったフォーマットにデータを指定したり、文章を入力するだけで、手軽にＷｅｂサイトができる。

しかし、今回の「伝える、励ます、学ぶ、被災地方言会話集」のような、音声を再生するのには、ひと手間を要する。具体的に問題を言えば、「Ｊｉｍｄｏ」の既存の選択メニュー項目に、オンライン音声プレーヤーがないのである。そこで、「伝える、励ます、学ぶ、被災地方言会話集」では、選択メニューのひとつでＨＴＭＬを自由に書き込めるウィジェットという項目を用い、そこに、オンライン音声プレーヤーのＨＴＭＬを書き込み、方言会話音声の再生を行う仕様としている。その際、方言音声のデータを保存するとともに、オンライン音声プレーヤーのデータの取得先として利用しているのが「Ｄｒｏｐｂｏｘ」である。

また、技術的な面では、オンライン音声プレーヤーの種類についても、試行・選択している。オンライン音声プレーヤーにもさまざまなものがあり、それぞれ、Ｗｅｂブラウザとの相性や対応する音声ファイル形式というのが異なるが、そのそれぞれのオンライン音声プレーヤーを多様なＷｅｂブラウザで試した。そして、最も多くのＷｅｂブラウザで音声再生が可能という点などを評価して、「Ｙａｈｏｏ！メディアプレーヤー」を採用するに至った。

６．今後の課題

以上、この方言会話資料について解説してきたが、今後に残された課題も多い。最後に、そのいくつかを指摘しておこう。

まず、この資料の目的として「被災地方言の記録」「被災者への励まし」「支援者の方言理解」の3つを掲げ、それらに役立つ会話資料を作りたいと述べた。このうちの、「被災地方言の記録」という点について言えば、今回の資料は地点ごとに見た場合、量的に十分なものと言えないことは明らかである。これは、各市町にまんべんなく収録地点を設けたために、それぞれの地点の公開データを整えるのに時間を要してしまったことがひとつの原因である。ただ、自由会話については各地点1 時間程度の録音を採ってあるので、それらの整理を進めることで地点ごとのデータをある程度充実させることは可能である。

次に、「被災地方言の記録」の一環として、今回の資料では場面設定会話を収録するという試み

を行った。これは、言語行動の目的に沿って 15 個の場面を設定したものであるが、もちろんこれだけの場面設定でその土地の言語生活が網羅できたとは言えない。先にも述べたように、目的別言語行動の枠組みを用いた会話収録の方式は、方言記録の重要な方法になりうると考えられるので、今後、網羅的で洗練された項目を体系的に構築することが必要となる。また、「支援者の方言理解」を促すという目的からこの方法を見た場合、災害発生直後から現在に至るまで、復興の各段階で必要とされるコミュニケーションの内容やそれに応じた有用な場面設定会話の中身も変わってくるのではないかという問題も残る。支援の段階に応じた会話場面の検討も必要な課題である。さらに、「被災者への励まし」という点から見たとき、そうした観点からの場面設定がもっとなされるべきだったとも言える。＜ねぎらい＞＜お見舞い＞といった励ましに多少とも関わる場面は設けたものの、より直接的に励ましの場面を設定する工夫があってよかったと思われる。今回は、被災者にふるさとの方言を聞いてもらうこと自体が精神的な支援になるという素朴な発想で作業を進めたが、その「方言の聞いてもらい方」をどう工夫するかを十分考えていく必要があるだろう。

加えて、今回は、東日本大震災の事後に、被災地についての取り組みとして一連の活動を行ったが、今後起きうる同様の災害に備えて、災害発生の可能性が高いと指摘されている地域での、災害に先立った方言会話資料の作成ということが求められるだろう。特に、場面設定会話は、支援者の学習のためという目的を掲げており、その意味で、外来の支援者が多い災害発生直後から半年以内が最も需要が高い。その点で、方言会話資料は災害発生前に予め整えられているのが望ましいと考えられる。例えば、南海トラフ地震の津波浸水予測地域などは、減災の観点からも、このような方言会話資料の整備が考えられるだろう。

さらに、このような会話資料は利用のしやすさの面での課題もある。今回のこの冊子は相当大部なものとなり、研究者が利用するにはよいが、被災者や支援者の方々が簡単に手に取って見られるようなものにはできなかった。一般の方々の利用の便を考えれば、市町ごとに分割し、しかも場面設定会話のみを掲載する等、手軽に利用できるような仕様を検討しなければならない。この問題については、冊子型の会話資料ではなく、先に紹介したようなＷｅｂ方言会話集が解決のための有効な手立てとなると思われる。だが、そのＷｅｂ方言会話集にしてもいくつかの課題を抱えている。

例えば、Ｗｅｂ上の方言会話集の取り組みには、次のような一連の課題が待ち構えている。

① インターネットを使えない環境や人々への対応

② 「伝える、励ます、学ぶ、被災地方言会話集」の宣伝、周知

③ 「伝える、励ます、学ぶ、被災地方言会話集」の評価、検証

④ 次の災害に備えたＷｅｂ方言会話集の準備

①については、本書のような冊子媒体での資料と、それに付随するＣＤの配布が解決への糸口になるだろう。その点でも、上で指摘したような一般向けの仕様を工夫する必要がある。また、ＣＤについても、今回のようなパソコンで使用するタイプだけでなく、ラジカセ等で再生できるものも作成すれば、この資料の利用者の範囲が格段に広がるのではないかと思われる。

②の点は、Ｗｅｂ上で配信し、共有してもらう特性を生かすためには、その存在を知ってもらわ

なくてはいけないということである。これについては、今後、折々の研究報告会などの機会を通じて、その存在が伝わるように周知していくつもりである。③の点は、このような方言会話資料をＷｅｂ上に置くことで、実際にどれくらい広く伝える効果があるのか、といった点を評価、検証するということである。「Ｗｅｂ媒体を通して、この方言会話集について知った」かどうかを尋ねる必要がある。④については、先述の災害前の方言会話資料整備という課題を受けてのものである。その作成には、まず、③の結果を踏まえつつ、さらに、それを作成する以前に、例えば「南海トラフ地震と方言ネット」のような、その会話資料を載せるためのプラットホームとなるＷｅｂサイトがそもそも必要となる。私たちの一連の活動を通し、「災害と方言」に関する活動への関心を高め、それをＷｅｂで展開する活動の可能性と有用性を伝えていくことが、次の取り組みにつながっていくと考える。

このほか、当然のことながら、会話収録のための調査技術のレベルアップという課題も挙げられる。自然な会話を収録することは専門家でも難しいと言われるが、今回の取り組みは、学生たちが主体となって行ったものであり、その点、自ずと限界があったことは認めざるを得ない。ただ、今回の取り組みは、私たちにとって貴重な経験となったことはたしかであり、その経験を次の機会に生かしていきたいと考える。

文　献

天野真志（2012）「東日本大震災にともなう歴史資料保全の取り組み」『情報処理学会研究報告』DD（デジタルドキュメント）86-4、一般社団法人情報処理学会

国立国語研究所（1978～1987）『方言談話資料』全 10 巻、秀英出版

国立国語研究所（2001～2008）『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成』全 20 巻、国書刊行会

小林隆（2004）「アクセサリーとしての現代方言」『社会言語科学』7-1、社会言語科学会

小林隆（2012）「方言ネットでつなぐ」『第 30 回社会言語科学会研究大会予稿集』社会言語科学会

白岩広行（2012）「「震災を語る方言談話資料」の試み」『日本方言研究会第 94 回研究発表会発表原稿集』

東北大学方言研究センター（2011）『東日本大震災と方言』東北大学国語学研究室

東北大学方言研究センター（2012）『方言を救う、方言で救う－3.11 被災地からの提言』ひつじ書房

永田英明（2012）「災害と大学アーカイブズ―東日本大震災における東北大学史料館の対応」『東北大学史料館紀要』7、東北大学史料館

永田英明・徳竹剛（2011）「東日本大震災における東北大学史料館の被災状況と対応」『アーカイブズ』45、国立公文書館